

日記の虚実

紀田順一郎



新潮選書

62年間という世界最長の日記を遺した野上彌生子、女性遍歴をあたかもスケッチのように綴った竹久夢二など、最近大きな話題を投げた作家や画家の日記を中心に、その読みどころと隠された秘密を探る。あわせて、人はなぜ日記をつけるのか、日本人の日記に天候の記載が多いのはなぜか等、これまで等閑視されてきた日記の本質の究明を試みている。

著者

につ き きよじつ
日記の虚実

〈新潮選書〉



© Jun'ichiro Kida, Printed in Japan, 1988

昭和六十三年二月五日 印刷
昭和六十三年二月十日 発行

定価八〇〇円

著者 紀田 順一郎きだ じゆんいちろう

発行者 佐藤 亮一

印刷 錦明印刷株式会社

製本 植木製本株式会社

発行所 東京都新宿区矢来町七一
株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
電話業務部(0303)二六六一五一
編集部(0303)二六六一五四
振替 東京四一八〇八番

〔乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。〕

ISBN4-10-600339-2 C0395

日記の極夫

紀田順一郎

新潮選書



日記の虚実・目次

手探りの活字日録——『葛原^{くずはら}勾^{こう}当^{とう}日記』9

ヘレン・ケラーも感動した「ワープロ」の仕組み 四十五年間も続けられた日記 世俗に染まらぬ芸術家氣質 勾当日記の二つの謎 内面生活をあらわした歌の数々

飾られた真実——『樋口^{ひぐち}一葉^{いちよう}日記』25

天才女流作家への思い入れ 薄倅な生涯における至福の瞬間 天啓顕真術会をたずねる 手紙で肉体関係を迫った久佐賀 「一葉処女説」論争 仕事師久佐賀の弱点 抹消された？ 久佐賀の記録

こころの屑籠——『蘆花^{ろか}日記』51

人はなぜ日記をつけるのか 兄、蘇峰に対するはげしい憎悪 一日遅れで書かれた日記の謎 密室的環境に自らを置いた蘆花 日記を盗み読みし合った夫妻 「初恋の人」をめぐる夫婦の血みどろの葛藤

略して記さず——荷風「断腸亭日乗」にちじょう 79

誇張やウソに充ちた“創作的日記” “うるわしき協同関係”だったが……

日記と小説で攻撃に出た荷風 文文学者の知られざる経歴 荷風の“筆

誅”

情念の坩堝るつば——「劉生日記」りゅうせい 105

たとえていえば「癩癩日記」 肉体の欠陥に悩む新進画家時代 「精神

病」の遺伝に悩む 茶屋遊びに耽って日記中絶 花菊という芸妓への傾

倒 「文学者」として日記を書いた

愛の餓鬼——「夢二日記」 131

日記に記された悪夢の数々 大逆事件にかかわったために…… 夢の意

味するもの 「愛の餓鬼」だった夢二 死にざままで記録した稀有の日

記

無謬むびゅうの人——「野上彌生子日記」 153

六十二年に及ぶ世界最長日記 中勘助との秘められた恋の真相 夫野上

豊一郎への仮借なき不平不満 芥川、志賀、武者小路もめったぎり 現

代女性の先駆的タイプ

今日を生きる——『伊藤整 太平洋戦争日記』他 177

記録された開戦時の昂揚感 玉音放送の一瞬の描かれ方 民族的な自己

検閲があつた八・一五 自決しようとした海野十三 遺書までしたため

たが…… 「アタマ変だつたんですよ」 敗戦はそれぞれに不幸

日記の研究 205

当日前か翌日か 「毎日つける」という固定観念 動機だけで永続するか

日記が習慣となるには 日本人の日記は俳諧

あとがき 233

日記の虚実

手探りの活字日録

——
〔葛原くわはら勾当こうとう日記〕



勾当肖像画

広島県南東の深安郡神辺町は人口約四万の農村で、近年は隣接する福山市のベッドタウンとしても注目を浴びつつあるが、江戸後期の儒者で漢詩人の菅茶山が廉塾を開いていたことで知られる。

とりたてて景勝の地ではないが、丘の起伏に富んだ田園風景がひろがり、夕焼けが美しい。茶山も廉塾のまゝに開いた塾を「黄葉夕陽村舎」と名づけたほどである。じつに「ぎんぎんざらざら夕日が沈む」という、あまりにも人口に膾炙した童謡は、この神辺出身の葛原幽によつて作詞されたものだ。

その葛原幽の祖父が幕末に箏曲（生田流）の名人として知られた葛原勾当（一八一二―一八二二）である。盲人でありながら、半世紀以上にわたつて三備地方の箏曲普及に寄与し、八雲琴の考案者の一人でもあるといった、邦楽界での業績は大きなものがあるが、彼の名を永久にとどめるゆえんのもの、四十年以上という長期にわたつてつけられた日記なのである。

日記といっても、筆記は困難なので、すべて木活字で印字されている。およそ人名事典で彼の事績を記したものは必ずこの日記に言及しており、近年の史学の成果を反映した『国史大辞典』（吉川弘文館）は、ついに「葛原勾当日記」として、日記そのものを立項するにいたつた。これは昭和五十五年、没後百年を記念して日記全文の翻刻『葛原勾当日記』（小倉豊文校訂）が公刊され、

ようやく全貌をうかがうことができるようになったことと無関係ではないだろう。

じつは、かくいう私もその公刊本に接したいへん感銘をうけたあまり、なんとしてもこの眼で現物を見たくなつて、一日現地へ足を伸ばしたのである。

福山駅から福塩線に乗りかえて三つ目、神辺駅で下車して車で田園地帯に行くこと約五キロ、八尋やひろという村の小高い丘の中腹に蓮乗院というお寺がある。ここが葛原家の菩提寺で、問題の日記が収蔵されている。ちなみに日記とそれを記すための道具は現在広島県の重要文化財に指定されているので、やたらに参観することはできない。

目のあたりに見た日記の現物は、横綴じで縦十センチ、横十七センチほどのものを、だいたい一年分ずつ綴じているが、ほとんどは子孫の手で一葉ずつアルバムに貼りかえられていて、もとの横綴じ本の形を保っているものは数冊にすぎないが、保存状態はきわめてよく、印字も写真で見ると鮮明である。なによりも、一行十字ずつ、きちんと行間と字間を揃えられている。うえに、印墨のムラさえもなく、印字されているのは驚異である。何十年間にわたってそのようなのである。目の見えない人に、どうしてこのような離れ業が可能だったのだろうか？

その鍵となるのが、いっしょに保存されている印刷用具である。まず容器であるが、長さ二十六センチ、幅十一センチ、深さ四・一センチの桐箱で、筆入れのような外観だが、挿込み蓋の上部に丸い真鍮製のボタンがついている。これは上下の位置を知るためのものだろう。蓋を取ると、中にもう一枚、薄い内蓋があつて、その片面に白紙が三枚ぐらい重ね貼りしてある。これは内容物が動かないようにすると同時に、印字のさいの下敷の役割をしている。

内蓋をとると、黒い木活字が整然とおさまっている。一行七字で九行分、計六十三字だが、その内訳は「いろは」四十七字、撥音の「ん」と変体仮名の「ゑ」が二字、一から十までの数字が十字、「正」「月」「日」「同」の頻用漢字が四字という構成である。

ほかに印墨のある場所に雑然と収められている活字が四個ある。「と」と「、」を一本の両端に彫ったもの、同じく「奉」と「お」のセット、「御」と「候」のセット、「ゞ」（濁点）と「は」の異体文字である。ほかに「申」があつたのは確かだが、活字は紛失してしまっている。

さて、これらの活字の一本一本を目の不自由な人がどのように識別し得たかということだが、字面を指で確かめるといふのは汚れるし、琴を演奏するような人は指を大切にすることであろうから論外である。箱の中の位置で覚えることも、取り出したり収めたりしているうちに、すぐに順不同になつてしまふにちがいない。

ここで当然考えられるのは、一本ずつ印しるしをつけておくことであらう。つまりコードである。

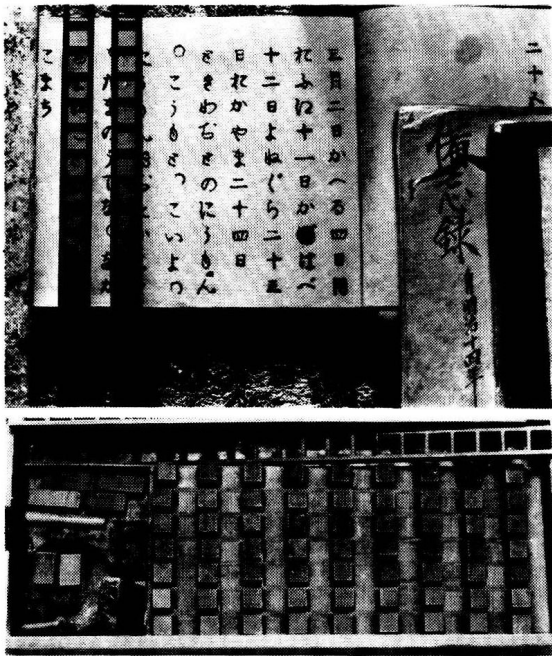
たしかに、木活字にはよく見るとそれぞれ異なる数の線が刻まれている。たとえば「い」をつまんで字面を下に向ける——つまり捺印の手つきをしてみると、親指のあたる左側面に「一」と溝が一本刻まれており、人差し指か中指のあたる右側面にも「一」がある。

同様に「ろ」は左「二」、右「三」、「は」は左が「二」右「三」である。このように最初の一行はすべて左側が「二」であり、右側が上から「一」「二」「三」「三」「三」……となつていゝのである。

ここまでわかれば、あとは容易に推察できよう。第二行目（「ち」からはじまっている）の左

側はすべて「＝」で、上から「一」「＝」「＝」「＝」……と続く。勾当は「いぬ」と印字したいとき、ただちに脳裏に「一一」「＝」「＝」「＝」と浮かび、指は自動的に該当の刻みを探っていたのだろう。

これで原理はわかったが、一つ重要なことが残されている。どのようにして、まっすぐに行間をそろえ、字間も規則正しくあけることができたのだろうか。



勾当が使用した木活字

その疑問を解いてくれるのが、同じ箱に収まっている二本の木製の野杵である。割り箸ほどの細長い板きれに格子状に十九個穴を穿ったものと思えばよく、この板を日記帖の該当箇所固定して、穴の中に印字をしていけばよい理屈である。一行印字し終えたら、もう一つの杵を左に隣接させ、以下つぎつぎに左へ野杵を移動させていくことによって等間隔に印字できる。そのためには該当の野杵をしっかりと固定しておかなければな

らないが、活字大の木片の頭にピンを挿したものが二個用意されている。これをあらかじめ日記帖の行の上下に固定し、ピンのすぐ下の罫から印字していったのである。かの下敷はそのためのものであり、現に無数のピンの跡が残っている。

感動的なシステムである。黒光りする活字とピンの跡を眺めると、見えぬものの世界を必死に伝えようとした勾当の情念が、いまだにひしひしと伝わってくるような気がする。昭和九年（一九三四）来日したヘレン・ケラーはこの装置を知って感激のあまり、「これこそ東洋のタイプライターです」と叫んだというが、いまわれわれを見ると、盲人の心象世界を生き生きと伝える、真の意味におけるワードプロセッサーではないかとすら思えるのである。

四十五年間も続けられた日記

葛原勾当は、北辺にロシアの艦船が出没し、豊後に大きな一揆が起こった文化九年（一八二二）、備後国安那郡八尋村（現在の神辺町八尋）に矢田重知の長男として生まれた。家はかなりの資産家だったようだ。

三歳のときに痘瘡とうそうを患って失明、一時は悲嘆にくれたが、音曲への興味に救われ、九歳のときにキクという瞽女ごにょから琴を習ったのをきっかけに日夜精進し、十一歳になるとすぐに京都に上って松野勾当の内弟子となった。もともと才能が豊かだったので、十四歳で座頭となり、翌年帰国して箏曲教授を開業した。

日記はその教授生活二年目の文政十年（一八二七）からはじまっているが、当初の十年間は弟子か周囲の者の代筆にすぎず、たとえば天保二年（一八三二）十月二十四日付を見ると「岡本二来ル。琴、あつさ・三味、滝つくし。同春寿・琴、玉川。城橋、表・浮舟ばなし。三味、末のよるべ・同、とりをい」などという具合に、出稽古の先と弟子名、曲名などをメモしただけの、無味乾燥のものでしかない。無論、この稽古日誌だけでも、勾当が岡山や尾道など三備地方全域に足をのばしているばかりか、折にふれて上京しては腕を磨くために、師匠から稽古をつけて貰っているようすがうかがわれるのであるが、これだけでは勾当の名が喧伝されることはなかったにちがいない。

勾当がいかなる動機で、だれに木活字を作らせたのか、本当のところはわかっていない。とにかく、二十六歳の天保八年（一八三七）一月一日から、突如として印字の日記が開始されるのである。

正月一日。同、詠める。

立ち返る年の始めは何となく賤が心もあらたまりぬる

「山姥」琴にて五遍。

同二日。「越後獅子」琴にて十二遍。大江村、ちよみ、八ツ時に來たる。「吾妻獅子」三味線と合せたること、その数を知らず。

思うどち調べて遊ぶ糸竹の数にひかれて今日も暮しつ